

# 前近代における広島湾頭地域の開発とその進行（後）

東 皓 傳

（受付 2003年5月12日）

## 4 広島沖積平野

—その地理的・歴史的視点

- (1) 地域形成の社会的意味
- (2) 地域経済の集積
- (3) 古代から中世へ

## 5 微地形を追う

- (1) 平地横断10米の等高線
- (2) 古川，安川，茅原川
- (3) 古市・祇園の市中
- (4) 原庄・北庄

結びにかえて

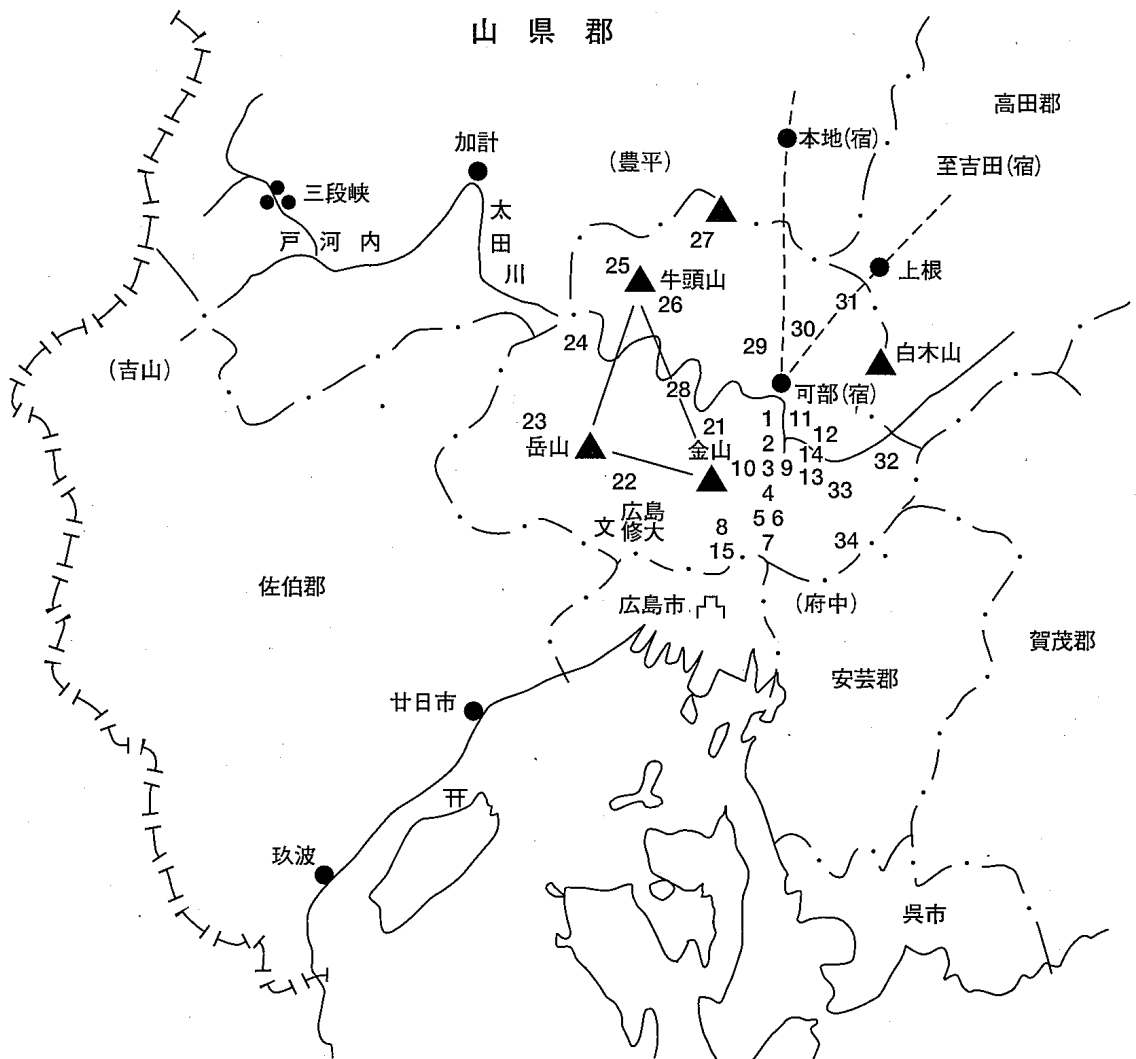
## 4 広島沖積平野

—その地理的・歴史的視点

### (1) 地域形成の社会的意味

可部から広島へ僅か15軒程度の河長ながら、しかも東西幅も4軒程度の狭い地域に、なぜ集落（行政的な意味）が立地し、それが現在まで続く原因をつくったのであろうか。図1のなかで、1～15はそれらに関係するが（明治22—1889—の市町村制施行の村名を基準）、そのひしめきぐあいは何と表現すべきか。それは、旧安佐郡（現在の広島市安佐南区と高田郡の旧白木町を除く安佐北区および東区の福田・馬木地区）の郡域のなかで考えると一層鮮明となる。旧安佐郡は単に太田川の沖積部だけではなく、背後の山地部や丘陵地も含んでいた。図1のNo. 21～No. 34がそれらであるが、前者のNo. 1～No. 16との対比がここに浮上する。

図1 旧安佐郡中心概念図 (広島市や他の諸郡に囲まれた中央部が旧安佐郡)



[注] 1～15は表1に記載。

- |         |        |        |         |
|---------|--------|--------|---------|
| 21 安村   | 22 伴村  | 23 戸山村 | 24 久地村  |
| 25 小河内村 | 26 飯室村 | 27 鈴張村 | 28 日浦村  |
| 29 亀山村  | 30 三入村 | 31 大林村 | 32 狩小川村 |
| 33 落合村  | 34 福木村 |        |         |

No. 1～No. 16の前者では、表1に示したように独立した村とは別に、N. 21～No. 34の後者の村の大字として入り組んでいるものもある。いわゆる市町村制施行（明治の大合併）までは近世を通じて立派な独立村であり、それが合併によって大字として残ったわけである。明治の大合併では以下のような事情を含んでいた。すなわち、

東：前近代における広島湾頭地域の開発とその進行（後）

- ① すでに明治11年（1878）の郡区町村編制法で市街地は区、農村部は町村名で行政単位を有し、自治体として発足した。そして、明治17年の制度改正により連合戸長役場の設置（例：東原・西原村）があったものの、政府は憲法制定の前提として諸制度の整備が必要であり、足腰の強い地方自治の制定もその1つで、明治21年4月市制・町村制を公布し（ドイツ人アルバート・モッセ、山県有朋、若手官僚らが関係）、翌年4月から実施することにした。在来の生活共同体としての地域を尊重しながらも隣保団結を基礎に、国家の要求に耐えうる独立町村としての実力を有することが目的であった。同年6月の内務大臣の指針は、凡そ300戸以上を基準とするものである。
- ② 毎年のように出水し洪水被害に恐れを感じながらも、この狭い沖積地に集落が形成されてきたのは多量の水や日照を求める米作を可能ならしめた事情がある。出水は簡単に自然堤防を越えて耕地地域内の低地に湛水するが（川上から川下へ）、沿岸部では上げ潮が淡水の流れを止めて川を逆流させる。また、稲の成育に関係する長期に亙る水の張りには平地の広がりが必要である。また、耕地対象地域内に残る旧流路はそのまま灌漑用の水路や排水路として利用されやすい。この点、凡その耕地区画も旧水流の広がり（土砂の広がり）に従っているので、用水の操作も比較的対応しやすい。
- ③ 周知の如く、稲は酸性の植物で、前年の収穫の残滓は次年度の基礎肥料に役立ち、湿地帯の草や洪水被害の軽減にも役立つ竹林のササも肥料に使用可能である。なお、酸性の作物であっても、十分な水にある時間をかけて浸していくことでその性質は消えていき、稲の株分かれ（3本くらいの塊の苗は15本くらいになる）を大いに助けるわけである。かくて、稲の連作は可能であり、多くの人の命を支えることができる。旧安佐郡の山間部で聞いた「斗でき」ということばが米の生産基準であるのに対し、この沖積地では「石高」が表現の基準になっている点をここで想起することができる（米10斗で1石に換算、1斗は約15キログラム）。

ところで、八木の狭隘以北では河床勾配も大きくて、洪水の水勢も強く家や竹藪を押し流すことがあるが、以南では切開されやすい堤防を離れていけば一面に広く湛水した部分もみられ（もちろん平素の河道部はうねりながら流れ去る）、低地の家屋ではむしろ広島湾の引き潮に導かれた洪水の動きで家組みの壊れることがある。それゆえ、中筋の低地部一帯では戦前までの家屋は周囲を石垣で囲って1～2米程度は高くし、経済的に余裕があれば一段と高く石垣を組んで蔵を設けていた。そして、近隣相互に避難先を決めており、男たちが土手の見廻りに出かけている間に女性はおにぎりをつくり子供を連れて避難することにしていた。山麓では凡そ20米の高度から上に集落が立地していたし、平地部でも旧中須を形成した微高地の上に幅広く木組みして（母屋・納屋）、冠水後の引き水に持ち運ばれないようにしていた。他方、洪水はナイル川同様に川上から肥沃な土壌を運び、冠水はそれを沈澱させていた。

すでに、米の収穫高を「石」で表現するのが当然と考えた地域と、米の不出来ゆえに「斗」で表現するのが日常生活のなかに溶けこんでいる地域を指摘したが、前者が人間の利に貢献しているとみれば、そこに洪水がある。後者は洪水の代わりに稲にとって最も欲しい水が必ずしも十分でなく、酸性化を止めにくい点がある。そこで、「利にあるところ難あり」という昔からの地下<sup>じげ</sup>のことばが想起されるわけだ。

## (2) 地域経済の集積

明治の富国強兵策にもつながる中央集権体制の強化、国会開設の前に確立して置きたい地方自治（中央政党勢力に動揺を受けないため）などを目標に、従来の自然村をより拡大した行政村としての規模で、日本の支配構造の底辺部を固めることにしたわけである。すなわち、市町村は自治体事務のほか徴税・戸籍・徴兵・教育・衛生など過大な国政委理事務があったにもかかわらず、その遂行のための自主財源をもたせてもらえなかった。市町村財源は自然村がもっていた共有財産収入と付価税収入程度のもので

東：前近代における広島湾頭地域の開発とその進行（後）

（村として所有していた入会地の多くは国家に所属することになった）、合併して町村規模を拡大せざるを得ない状況下にあった。

このような経済態勢の洗練を経ても、この沖積地域では小村域がひしめいていた。今、三篠川流域最下部の深川村も含めた太田川流域の地域（安芸郡下の戸坂村を除く）として表1にある No. 1～No. 15の経済集積の1例にふれたい。この数値は『郡役所廃止記念安佐郡誌』（昭和2年—1927）を参考にしたもので、大正の末年頃のものである。藩政時代の租税の主なものは貢米であり（それ以外のものは極めて少額なるがゆえに省略するという）、その郡計は38,475石2斗7合5勺で、換算金は1,346,634円（1石＝35円として）という。これに従って No. 1～No. 15の数値の金額を計算すると554,451円になる。すなわち、沖積地の狭い地域ながらも金額的には郡全体の41.17パーセントを占める。地域経済に果たす米の重要性を知ることができる。

なお、同上の郡誌によると郡内の産業組合32のうち、貯金高の多い順のベストテンでは9組合が沖積地部に関係する。すなわち、①三篠（233.7万余円）、②緑井（33.5万余円）、③飯室（25.1万余円）、④祇園（24.0万余円）、⑤原（23.9万余円）、⑥三川（23.0万余円）、以下⑦川内、⑧長東、⑨八木、⑩山本と続く。三篠は広島郊外として農産物（米・野菜など）に加えてゴム・針などの工業もある。当該地域からはずれる唯一の飯室は可部を受けて山県郡へ3方向（現在の千代田、豊平、加計）の経済活動の焦点部にあり、米や藺草、養蚕が盛んであった。

この沖積平野部は米による経済集積が進み、人の動きが活発化し、近世以来にめだつた太田川の舟運や可部軽便鉄道（明治42年—1910—横川から）など交通手段の連動性をみせることになる。そして、このような地域経済の集積をもたらした遠因を古代の地域開発に求めながらも、中世における東国武士の下向と定着化による地域経済への積極的参入はどのようなものであったのか。

当該地域に直接の影響を与えたのは中世下向の武田氏の存在が大きいが、

表 1 関係町村貢米換算額 (図 1 と連動)

図 1 の No.	旧町村	所属 領主	貢米額	換算金額
	可部 (町)	主	160.824 <sup>石</sup>	5,629 <sup>円</sup>
7	長東村	主	800.117	28,004
8	⌈ 山本 東山本村	主	486.116	37,701
	⌋ 西山本村	主	591.045	
5	⌈ 祇園 南下安村	主	767.441	54,200
	⌋ 北下安村	主	781.117	
6	⌈ 原 東原村	主	567.351	61,072
	⌋ 西原村	主	1,177.559	
3	⌈ 三川 中筋古市村	上	467.170	35,029
	⌋ 東野村	上	533.650	
9	⌈ 川内 中調子村	主	521.450	35,240
	⌋ 温井村	主	485.416	
2	緑井村	主	1,188.022	41,581
10	大町 (安村)	若	721.445	25,251
4	中須 (安村)	主	477.195	16,702
11	中島 (中原村)	主	586.653	20,533
12	⌈ 深川 中深川村	若	860.586	50,075
	⌋ 下深川村	若	570.126	
13	⌈ 口田 小田	甲	507.000	37,378
	⌋ 矢口	甲	560.950	
1	八木村	主	841.805	29,463
14	玖 (落合村)	若	501.160	17,541
15	⌈ 三篠町 楠木	主	464.027	59,052
	⌋ 打越	主	508.254	
	⌋ 新庄	主	714.910	
	(計)			554,451

[注] 主：浅野藩主 上：上田主水 (家老)

若：浅野若狭守 甲：浅野甲斐守 (三原浅野家)

東：前近代における広島湾頭地域の開発とその進行（後）

承久3年（1221）の変で後鳥羽上皇方についた荘園領主や武士の所領は没収され（承久の変），そこへ入部した地頭に武田氏（金山<sup>かな</sup>=銀山）・香川氏（八木城山）や熊谷氏（三入荘）などがいた。蒙古襲来を予想する幕府の強い要請もあり，根拠地を東国の本領から西国に移すようになる。そして，彼らはそこに展開していた農・林・水産業や水運などの高い経済力に強い関心をもち，それらを取り込んで拮勢の方向に進むのは当然であり，対国衙や対荘園の関係でトラブルの発生は当然であった。守護・地頭としての彼らは現実に動いている生産組織のなかに入り込んで，公認されている<sup>した</sup>下<sup>じ</sup>地管理権・警察権・徴税権に権者として就任すること，さらに反別5升の兵糧米を年貢や官物のうちから取得することなどの立場を超えて活動したわけである。

西国に下向して定着化する東国の武士と国衙や荘園領主などとのトラブルのほか，武士間相互の利権争いもみられた。弘安10年（1287）の頃，三入荘の地頭熊谷頼直は佐東河の河手（川の水運税）や鶉船（その収益），倉敷の件などで佐東郡の地頭武田泰継と相論し，幕府の採決が下りているが，内容は不明である。図2の八木細野付近に「眞蒲」なる地名があるが，当地は広い中洲になっており，字名は「十歩一」である。古く一割の通行税（ここでは舟運，筏関係など河手と思われる）を徴収した場所に関係したものか。河中のことゆえ，用益に応じて臨時に使用された場所であったものか。いずれにしても，この図の<sup>なる</sup>鳴付近から沖積部に出る太田川の川筋は，中原村の中屋付近では分流し，河床状況によって本流も変化したようである。等高線の20米をたどると可部市中の南で1つのヤマがあり，三入村（可部東の根ノ谷川筋の川上）の町屋（熊谷氏の市場集落）から分出した南村市という小松原が立地する。つぎのヤマは中屋の北西にあり，この両者とも河道沿いに自然堤防や中洲の名残がある。現在の本流部について先掲の『安佐郡誌』は，中原村の項で延享元年（1744）8月の洪水の結果であるとの伝承にふれている。そして，恐らくは中世の河戸<sup>こうど</sup>（可部の西で四日市村の前身）が太田川筋では川船の終点部（河口から）ともいわれる点な

ど（同地は等高線25米で水難を避ける位置）、自然的・人文的な面から中世・近世の社会的状況を幅広く考えることになる。

話を戻そう。生産の結果に群がるのではなく生産活動そのものの実をあげるような武士たちの働きはみられなかったのであろうか（たとえ、それが、自分たちの得点を増加させようとする意志があったとしても）。この視点での武田・香川・熊谷各氏の行動には未だ解明されない部分が多い。二毛作・牛馬耕・深耕可能な鉄製農具などの関係する中世社会であるが、『広島県史中世』では在国司武田泰継が1290年前後に新勅使田百姓七郎の田に麦を蒔いたことにふれ、安芸でも裏作のあったことを述べている。

### (3) 古代から中世へ

周知のごとく、広島湾頭部背後で可部付近より以南の太田川流域では、その東西両サイドの丘陵地や小山地部に弥生・古墳時代の遺跡や遺物の存在がある。そのなかでも東側では中小田古墳群（旧口田村小田、そのなかに三角縁四神四獣鏡の出土、京都山城町の椿井大塚山古墳出土のものと同範という）、西側では宇那木山古墳群（旧緑井村、太田川西岸部では唯一の前方後円墳という）、神宮山古墳群（同、1号墳に含まれる石室は太田川流域で最大という）などがある。そして、この東西にあって南北に2系列の遺跡・遺物の出土地の内奥部（可部付近）にあって東西方向の福王寺山塊の麓では上ヶ原、青、給人原などの古墳群があり（6～7世紀のものという）、後世にみる狭い沖積地への集落形成への遠因がみられる。そして、出土物のなかには青銅製品や鉄製品もみられる。

ところで、紀元前200年頃から紀元後200年頃という弥生文化の時代では、前300年頃に北九州が大陸から受入したという稲作技術が西日本一帯に拡大・定着するなかで、生産用具は社会の基本的役割を担っていた。弥生前期では木製用具が豊富であり、それに鉄や銅を刃先につけたり、鉄鎌・石包丁・石鎌などもあって農具は多様化していた。木製農具も依然として使用されていたと思われるのは、低湿地での水稻栽培が中心であったため



東：前近代における広島湾頭地域の開発とその進行（後）

あろう。しかし、時代の変遷とともに湿地から中洲の上や山麓・河谷などへ開拓が進むにつれて鉄製農具の有効性が一層強く認識され始め、また、生産の増大にともなう迅速な生産物の処理を望んだ点も考慮されねばならない。かくて、専門の鍛冶職人が兼農の立場を離れて独立することになるが、それは主に中世になってからのことではなかったか。鉄製農具の一層の普及の背後には鍛冶職として独立できるだけの多様な製品の量産化が必要であり、また、原料としての鉄材を運ぶこと、それ以前に鉄（砂鉄）の生産地を確保することが重要であった。武士もまた鉄製品は必要であり、たび重なる戦争はその消耗性を高めたであろう。さらに、鉄製品の質的向上も重要であり、製鉄用の木炭の生産やその輸送も兼ねて川船や馬の背が求められ、陸路の整備も関係したと思われる。

古市は、中世において安川・古川の接点部であり、下安（元和5年—1619—の下やす村は正徳2年—1712—では南・下2村に分離、明治の市町村制施行—前述—で祇園村）と同様に武田氏の城下集落でもあり、古市には鍛冶垣内（カジカイチ・カンジャガーチ＝地元よみ）が、祇園地区には匠が集まっていたという。安川の東側を占める古市であるが、この鍛冶屋垣内は河道を越えて西側（武田山サイド）にあり、古市の領域であった点がおもしろい。このように考えてくると、先述した沖積地での集落の過密の主な原因追求では中世における武士団との関係にも言及せねばならないであろう。米の生産力の増強は単に農業関係者だけの問題ではないように思われるから。

ところで、図2を中心に集落の分布を考えたい。先述したように、太田川の沖積地での集落の過密は八木以南にみたが、詳細には八木の狭隘（八木城山付近）以南の地域についてのことであった。そこで、八木の狭隘で川上と川下を比較すると以下のような展開があろう。

- ① 川上で東西の山麓の海拔高度は20米であり、その線は可部市中の南で沖積地を横切る。すなわち、河流に対して直角に交わる形をとっているため、このあたりが沖積の始まりの部分であることを示す。

- ② 沖積地を横切る20米のラインと、川下で同様の性質をもつ10米のラインの間は僅か5軒程度だが、10米ラインが広島市街地部に入って自然な形で消える部分を百米道路付近に考えると約10軒になる。それゆえ、八木の狭隘以南の中筋低地部の平滑さが分かる。
- ③ 川上では中島（旧中原村、後に可部町域）の集落のみで、江戸時代は中島村として一村を構成していた。河中の旧中洲の上にその中心集落があるが、その主たるものは当地付近の太田川の河道が現状に安定してからの発達であったろう。
- ④ この川上部でも根ノ谷川を東へ押しやるほどに強烈な太田川の水勢ゆえに、小松原付近には広い中洲を形成した。さらに、南の尾和<sup>おわ</sup>付近にも洪水時を中心に三篠川からの水勢との競合で水力が弱められ、大きな堆砂層を形成した。なお、可部市中の南では西側に広い中洲が発達している。川下に比べて河床の勾配も大きいものの、運搬される土砂の量も相当なものがあつたようだ。

かくて、可部の南では太田川（中世は佐東川）の主流が東に偏在したようで、そのために中屋<sup>1)</sup>は八木の領分であり、また三篠川合流点付近のツ矢は、逆に久村（玖村）の飛郷であつたと伝えている。なお、文政9年（1826）父の後を継いで八木村の庄屋となり、後に割庄屋格に昇格した熊野忠左衛門は嘉永3年（1850）の大洪水で田畑が流失する大被害後、村民の反対を押し切って堤防の大改修を行ったという。その居宅は八木細野にあり、八木用水を完成させた桑原卯之助とともに両者は並んだ石碑に顕彰されている（現在は細野神社の上り口付近）。前者は卯之助の孫が建立し、後者は八木村民の建立であるが、後者の立場からすれば前者が個人の建立である点はどのように考えるべきか。

1) 中屋は中洲に開けた耕地ゆえに、肥料のための採草地を八木や上原に求めざるを得なかった。細野神社の氏子には中屋の集落の人々も含まれていた。

## 5 微地形を追う

### (1) 平地横断10米の等高線

平地を横断するということで、10米の等高線は河川からみて堆積の広がったことを示している。図3によれば、その線は上緑井・下八木から上<sup>かみ</sup>温井へ伸びており、太田川本流をくぐり抜けて旧西岸寺の<sup>さいがんじ</sup>小山（現在翠光台団地一帯）のある対岸へ渡って南下する。そして、その間 A → B → C → D → E → F → G の河道による切れ込みがみられる。ここでは A ～ C 群と D ～ G 群に分けて考えるのも可ではないか。

沖積地の進行はすでに前段でふれたが、八木城山付近の狭隘を通過した沖積化の運動では底置層の全体的な広がりの上に前置層が形成されていく。頂置層あたりでは湿地帯や中洲も出現し始め（ここまですらほぼ1万年か）、地域がもつ生来からの基本的な傾斜の性格もよみとれる形がみえてくる。そして、洪水時にはこの中筋の低湿地の始まり部分一帯に広く水面が展開するが、平水時になれば水は地形の様相に従って流れる。この場合、当地では水勢のメインは一応置いて考えるとして、A—B—C はほぼ同時展開ではなかったか。下部で西斜面から流入する安川の河道の変化をみると、A → a, B → b, C → c の連動性はすでに指摘したところである。安川は、中須付近で地面の傾斜に沿って東と南へ広がるデルタをつくることになる。それは図3に示した「中須」の領域を示す字体の表現で理解されよう（敢えて言えばつぎのさらなる1万年の展開の始まりと考える）。A—a のかつの流水路に、例の八木用水（定用水路）が乗っかっていることは言をまたない。さらに、A・B・C の流出点は C 付近にあったろう。C の上部から A や B に向けた水勢は西の阿武山塊<sup>あぶ</sup>からの崩落土によって（緑井の植竹付近は扇状地の様相を示す）早くから東へ押し出される傾向下にあり（自己沖積の作用以外に山からの砂礫の供給地の拡大）、結果的に C（古川）が残る形となった。もちろん、洪水時には十分に冠水し、水を流すことは多かったろうが、時の経過とともに減少していったであろう。A → a のコー

スに定用水路を設定したのはいかなる理由によるか。それは川下へ向って水勢を強めるために傾斜度を高めたいと考えたこと、さらに上<sup>じょうらくじ</sup>楽地—小<sup>こ</sup>原—植竹の山麓を通過することで湧水を確保し（太田川濁水時への対応）、定用水渠としての役割を十分にもたせることを願ったのではないか。今となっては設計・建設責任者の卯之助に聞く由もない。

さて、堤防の高度であるがBの南で「+3.7」がみえる。現在では堤防の内外に住宅や土揚げした畑地が広がり、その高度の大きさを余り感じない。しかし、川側にある住宅の裏側に回ると、その石垣の高さに驚かされる。最近、Bの自然堤筋の上部では、区役所からの工事により市道として堤上を削り道幅を拡幅した。工事現場で筆者が確認すると、堤高約3米のうち、上半分は川原の砂で、その下は風化した褐色系の砂壤土であった。すなわち、下から上へ約1.5米が自然堤防と思われ、その上へ地域の住民が何代にも互って川原の砂を掻き上げて堤防づくりに専念してきたものと思われる。洪水による土砂の堆積は河床を高めるため、それは地域住民にとって必然の作業であった。前回の引継ぎでラフながら1年1耗の積み上げを逆算して1500年前という数値を得る。現在からすれば当地域では紀元後500年前後にAやB付近で水勢が安定し始め、南の緑井山麓の等高線10米一帯での水耕も容易な条件下を迎えていたのではないか。600～700年頃における古代郷に緑井郷が登場し、養我郷は養義郷（八木）になぞらえられる根拠にもなっていくのではないか。

ところで、D～Fのあたりではアタマが丸味を帯びており、Cの鋭角とはかなりちがったものになっている。これは継続的に常時の水流のなかったことにつながると思う。すなわち、大出水時を中心に水勢があり濁水時には淀みや小湛水が散見される低湿地ではなかったか。下八木分は近くの土居や八木市（中世に地頭として進出した香川氏関係）があり、船着場として盛行したとはいえ、ずっと東へ延びて上温井（旧川内村）の頭も取り込んで現在の太田川河畔まで広がっている。その一部は、なお太田川を越えて東側の西岸寺の丘陵地の下あたり（玖村の諸<sup>もろき</sup>木川・落合川が合流して

東：前近代における広島湾頭地域の開発とその進行（後）

太田川へ注ぐ付近）も飛郷としてもっていた。これは、採草地を確保することも1因であったろう。Dの筋が現在の「せせらぎ公園」になっていること、そして太田川の洪水波の最初の押しかぶせはこの筋に当たることなどは前段で述べた。

旧川内村では、Eをアタマにした水勢がやはりA～D同様に西傾する方向で平地を南西に細長く広げているが、そこでは上・中・下温井という地区名で呼ばれる。主流と思われるCは古川と呼称されるだけあって、1600年の当初で本流がGへ移る前の中心水流であった。これに沿う松原（緑井）を中心とする自然堤防は下八木から南へずっと続き、現在の天満屋緑井店から大下（下緑井）へ伸びるもので、堤高への努力が続けられた。松原付近が七軒茶屋であるが、当地から八木市方面へ向うこの堤防は人の往来が盛んで、忠平渡（玖村渡）は賑いをみせていた。付加するならば、広島城下から歩いて可部へ向う場合、七軒茶屋付近が昼食時になること（逆に山県方面・高田郡方面からは豊平町の吉木<sup>よしき</sup>あたり・八千代町の上根<sup>かみね</sup>あたりからの朝の出発でも同様）であったようだ。このお茶屋は百姓持であったものか。

話を戻そう。Fをアタマにしての陸地の形成では、やはり南西へ広がる形で上・中・下中調子と3区分されている。図3のなかにある学校や役場は温井寄りの中調子<sup>なかじょうし</sup>分に建設された。温井分はたび重なる洪水で砂質が強く、中調子の方は壤土性であるため、土中の透水性の関係で水田耕作は後者に利があるという。畑地の多い川内についてはこのような視点も必要となる。中調子は昔「中庄子」とかいた時もあるというが、加計の上部にある西調子から洪水の影響で流れ着いたという線に沿えば、黒部川の上部和下部で同じ地名（洪水による）のあるケースと同様になる。なお、川内付近での自然堤防は（人工堤としての部分を除く）1～1.5米という（『佐東町史』）から、過去を考えれば紀元1000～1500年程度の年代が考えられ、それは1600年当初というG（現在の太田川）につながることになる。

「温井」や「中調子」の史料による初出は天文10年（1541）というが、古

代の安芸郡（太田川北岸～東岸～呉市方面）の河内郷にまで考えるのは（Cに主流があってその東側に位置している川内とはいえ）無理であろう。むしろ、中世にあった「北ノ庄」域に連携した形だが、それがしだいに独立化した地域にまで開発が進んできたということであろう。中世前期に原郷に接して北ノ庄があり、庄域では矢口、小田、東野、中筋・古市が小田八幡（こうずみ弘住神社）の氏子となっており、莊園鎮守社としての地域的まとまりをみせている（浄土真宗の沼田組もこの枠組になる）。

1300年頃と思われるが、武田氏が安芸守護職として城居を構えた。前を流れる古川をみて武田氏も水上交通の重要性を認識していたと思われ、警固衆と呼ばれる水軍を編成したのは当然のことであった。『佐東町史』は武田氏の「川内警固衆」に福島・福井の一族や譜代衆の山県・飯田・八木などの国人衆などがそのメンバーであったという。福島氏は、中筋の北寄り古川の本流とその分流（西への）する付近に居を構えたものか、中筋から古川沿いに北へ突出する形で福島址の地名を『芸藩通志—中筋・古市村』の村絵図に残している。『古市町誌』はそれをもって武田水軍（の主要メンバー）の1人であった福島大和守の住居跡かと述べている。当所は水勢豊かな古川に望み、また安川筋へも水流が開けた好立地条件をもち、武田氏の金山（銀山）城を正面に望むことができる。北へ温井、東へ中調子の地区があり、南は中筋地区が広がる。そして、その中筋の土手際には福島氏の祈願所であったオノ木神社（主管は先述の弘住神社）がある。温井・中調子の本格的開発と、その結果としての武田氏の分郡という佐東郡への取込みが連動したのではないか。中調子の浄土真宗本願寺派の明円寺は永正3年（1506）僧行空の開基というが、慶長9年（1604）福島大和守の次男右京進が行空に改変して開基したともいう。なお、福島大和守は天文10年（1541）武田氏が毛利氏によって滅ぼされると、毛利に従い「川の内衆」として水軍の一角を担うことになる。

(2) 古川、安川、茅原川

図3点線のアタマに黒丸印をつけているのは自然堤防そのままの名残りの部分である。古川筋は安川筋に比べて左・右岸の幅が広く、かつては相当に大きい川であったことがわかる。そして堤外の畑地も広い部分を占め、地域住民の土地利用への関心の深さを知ることができる。図の中央付近にある▲印の付近は洪水時における水の当たりの強いところで、堤防がよく決壊するため、耕地字名でも「池ノ内」や「実近」などがあり、後者は<sup>さんじかいけ</sup>実近池のことを示している。そのため、水不足に悩む西原への取水も最初に当初を考えた程である。図3に示した畑地（古くは当初から中洲の存在）を残しつつ、水田部（低地）を祇園の微高地に向う。そしてここでも北からきた中須わかれの自分水流や安川的水流などの合流と出合う。そして、祇園南の帆立の東部付近では南下するその河道は堤防がなく、周囲を掘込む形で進む。これは注目すべきことである。

なお、上記の付近で西原分では上・中・下の八日市の小字を残し、さらに長束分との境界が東に向うあたりでは下川手の名を残す。その延長は河<sup>こう</sup>合<sup>ごう</sup>という小字であり、地元での口伝ではこの方向で河道があり、太田川で再び合流していた。その傾向は長束を流れる安川にもみられ、平水時は東流して太田川に向うものの、太田川の洪水時には西へ逆流して新庄橋から山手川（己斐方面）へ向かう。長束一帯は南から広島湾の湾岸流（満潮時は西→東、干潮時はその逆）の影響もあり、河川による砂の押し出しも止められやすい位置にあった（安川については後述）。東山本・西山本の水を集めた茅原川が東へ流出するが、それが西へ屈曲する付近にはかつての可部線の「安芸山本駅」があった。山本方面への踏切は、現在線路の下を掘削した広い道路に変化している。図でみるように、当地付近はバックマーシュ（後背湿地）を流れる坪井川、堤防のなくなった安川も集まり、それゆえに祇園（南下安）、山本、長束の境界線もある混雑した場所でもある。満潮時にはこのあたりを通過する河水は押し止められて、上部へ滞留したことであろう。その水を灌漑用に受ける恩恵は西原、南下安、東山本のあ

たりが中心ではなかったろうか。市場付近は洪水時には大量の土砂が流出して微高地を形成していたものと思われ、現在も畑地がめだつ。

さて、広島湾の古代・中世の湾入は、現在でも感潮する安芸大橋付近から西へ西原の畑地の南側（ここは古川がつくった三角洲と思われる）、祇園の市中を包む微高地（長東の市場付近も加えるか）あたりではなかったか。そして、古川・安川・茅原川などが運び出した土砂は沿岸流の影響を受けて長東では、安川筋から太田川西岸にかけて厚く堆積した。先年、太田川の放水路工事にともなって、4米下から弥生時代の遺跡や遺物が発見されたが、この-4米については広島沖積平野の形成を考える上で非常に重要な手がかりとなる。

以上は主として古川を中心に述べてきたので、つぎは安川について考えたい。現在の安川は旧伴村の上奥畑（400米）付近に発源し、約5軒を流れ、中須で古川に合流する。太田川、古川、安川の大出水は毎年のもので、新年を迎えるたびにその年の被害に対する不安をもつものであった。とくに急斜面の安川は一気に増水し、大正5年（1916）の洪水では9米の水位で、そのために堤防上にあった安村役場も流失した。昔は洪水を免れる安全な場所に住居を構えるのが通常であったが、それでも流失家屋22戸、半壊29戸、4名溺死という状況であった。下上安付近を通過した安川は当地からデルタをつくるが、河道全体が上流のみの形相であり、ここで堆積を始める。地形の関係で南寄りに拡大する形であるが、基本的にA—a, B—b, C—cの対応を連想させる安川の河道の曲線は微妙であり、安川の水勢の強さを知ることができる。安川の洪水に太田川の出水を背景にした古川の洪水があり、両水勢を引き受ける古市一帯は常に大きな水損を蒙るため、すでに昭和15年（1940）にも安川の改修工事を陳情し、終戦を経て同25年に安川の古川への直結工事に着手した。そして、同30年に完成し古市以南は長東へ向かって現在の廢川敷となったのである。中世にはすでにこの方向でも安川の分流（本流か否かは別として）があり、前述の放水路工事では新河川敷の畑のなかから昔の洗い場が出てきたという。可部線の鉄橋以南を工



### 東：前近代における広島湾頭地域の開発とその進行（後）

事の対象とし、河道を直線化して古川へ伸ばし、出水を短時間で処理することにしたのである。

図3の古市と中須の間にある通称ヨコドテ（横土手）は家老上田主水の給知時代に建設したというが、そこは恐らく古川が安川筋へ流入する過程で自然堤防をつくっていたものであろう。その上へ人工的に大きく押かぶせする形であり、堤防の内側では家屋が何軒かあって堤防の厚味を増す形もみられた。安川は a → b → c のあたりまでに分流したり、自分の堆積した中須一大町一帯の土砂のなかに滲透したものであろう。僅か5料の河道ゆえに濁水—洪水の繰返しに近い形であったようだ。古川は古市の上から西へ、そして南下した。古市の上にあるヨコドテは近世のものであるが、建設年代は不明である。恐らく1600年の当初古川から現太田川への本流移動があり、水位が下がり（安川も分流して古川へ向ったとしても平水量は古川よりの供給頃よりは低いと思われるゆえ）、安川も本流部が古川の一つった古市西の河道へ転移した以後のことであろう。そして1600年代の後半では築堤や灌漑水路の整備が主に村や地区単位で行われた頃以後と考える。中須の領分が古市の北から西へ取囲むように広がっているのは古川の展開と関係づけておもしろい。そして古市西では河床に低い土手があり（自然堤防で中土手と呼ぶ一周囲は畑）、それを過ぎて行き2.5米くらいの高さの坂道を上るといわゆる人工堤の堤上（馬踏<sup>ばぶみ</sup>）へ出る。堤防上は村と村を結ぶ主要通路で、遠望可能、しかも雨後でも道の乾きが早く、ぬかるみも少く歩きやすかった。堤防の上は日中常に（時には夜でも）何人かの人<sup>びと</sup>が歩いていた。

この安川筋も古市橋付近から南へ西岸は自然堤防が続くが、西原の領分に入るあたりからはそれも低くなる。それは逆に東岸が西原を洪水から守るために人工を加えて堤防を高くしたためである。廃川敷になった現在、兩岸堤は削られて道路になっているが、やはり西岸の方が低い。すなわち、安川の洪水を緩和するために洪水は水田の広がる中須方面へ向かって逆流させる遊水池的な役割をもたせている。そこに上言土手<sup>じょうごん</sup>があり、上記の

水の運動を導く形である。これも自然堤防と思われるが、その発生は近くにある坪井川沿いの畑地と併せて解明できていない。恐らく安川が大町や中須へ流出した当初の主流部がつくったものと考えられなくもない。この線に沿って南東へ下ると西原の畑地の凹みに一致する。これによれば、かなりの水勢があり、古川からの流入もそれを助けたものか。

上安一下安の一連のものは武田氏の<sup>かなやま</sup>金山（銀山）山麓での活動によるものであろう。前述したように1221年武田氏にも西下の命があり、代理を派遣したものの1300年頃には築城して定着化が進み、この付近での地域経営では金山城麓にあって政庁の所在地と思われる山本、後に寛永（1624—43）の検地で上安から分村する大町（家臣団の居住という）、同じく正徳2年（1712）までに南北に分村していた下安（中世は凡そ巖島領）の押領、（1400年代）による商業・交通要地の確保、古市も城下集落にするなどの展開があった。武田時代では安の上安付近から大町あたりまでを上安に、そして祇園地区を下安にしている。さらに今の上安と大町の間空間域は相田（中間にあるということでアイタ、アイダと呼び愛田とかいたこともあるという）としたが、これらはいずれも安川の流りに沿っている。なお、北下安の地にある佐東祇園社<sup>2)</sup>（祇園天王社）は明治6年（1873）安神社に改称した。口伝では元慶5年（881）別当感神院の僧宥尊が大和長谷寺より南下安の松尾山（青原）に勧請したが正安元年（1299）の戦火で家臣団の

2) 近郷からは「お祇園さん」の呼称で親しまれているが、「佐東河社」として祇園の末社である。貞観11年（869）天下に疫病が流行したとき牛頭天王（インドの祇園精舎の守護神、除疫神として伝わり京都祇園社の祭神となる）の崇りであるとして御霊会（祭礼）を営んだこと（祇園社の創元は貞観18年—876というが）が知られる。京の祇園社の神領が商工業地であったため、平安末期以来綿座、材木座、魚座など多くの座をもち、座役を徴収していた。祇園社の鎮座で早くより集落ができ参詣人も増え、靈験あらたかな神社とされた。仏や菩薩が直ちに救うことのできない衆生のために、それに代わって仮りに神として姿を現わすのを垂<sup>すい</sup>迹<sup>じゃく</sup>というが、そこに茅の輪をかけて疫病を免れた素戔鳴命が宛てられており、佐東祇園社は同命、稲田姫命、<sup>おおなむち</sup>大己貴神を祭祀する。神仏混淆の時代には、祇園社は感神院ともいわれ（876年神託により牛頭天王を播磨国から山城国八坂郷に移祀したが、元慶年中—877—80—藤原基経が靈験を感じてこの地に精舎をつくっ

東：前近代における広島湾頭地域の開発とその進行（後）

屋敷ともども焼失した。しかし、御神体はみこしで現在地（御旅所）に移動して無事であり、武田氏は直ちに当地へ再建したという。巖島勢の水運の要地に地歩を根づかせる第1歩であったろう。逆に同社は安芸国衛領のうちに感神院免田を設定した国衛や祇園神人兄部職を掌握した守護とも関係をもっていた（『広島県史中世』）。

さて、図3で茅原川は現存しない。大正15年（1926）、昭和3年（1928）の大水害の復旧工事では現在の形（山本川）に変更された。すなわち、水路は図3の山辺小川と示した河道をそのまま東山本へ延長し、西山本の川筋も受け入れることにしたのである。ここでは甲の部分に堤防があり、乙の部分へ水を排除する形をとっている。ここでは、当初の茅原川は市場のところで南曲せず（とくに洪水時）、そのまま東へ押し出して安川の弯曲部をつくったのではないか。安川もこの弯曲部付近では堤防もなく、水は自分が運搬・堆積した土砂のなかに滲透していったと思われる。茅原川の方も自分が運び出した土砂で河床が高くなり（海水の流出入もあって）、低い方の南へ曲がったものであろう。市場はこのような経過をもつ堆積の上にあり、古くから塾や役場もあって村の中心であった。

茅原川からの水勢が途切れると、安川はそのカーブを利用して東の河合へ向かっていた水勢を弱め（堆積の上昇）、茅原川につくったカーブに沿って進み、独自に南下していく。旧国道で新庄へ南下する部分は大きな低地が山手へ向かって広がり、かつての深い湾入をみせていた（水田地帯）。そして市場付近から南へは茅原川につくった川原や国道沿いには一部の埋立もあったものか、この湾入部と好対照を示す。また、旧国道の東側は長東神社の南一帯で南下するほど小高いものになり、堤外では近くの牧場の乳牛も放牧されていた。なお、現在の放水路工事によって長東神社は東に向って目前に高い堤防があり、南の方も安川は直線的に放水路へ入ることになった。

たという）、興福地—延暦寺別院—日吉大社の末社などの所属を経て、明治元年（1868）廢仏棄釈によりその号を失ったものである。

(3) 古市・祇園の市中

古市では堤防を通過する旧国道上に10.5米の水準点があり、それは北へ緑井で同様に10.8米を記録する。すなわち、高度からすれば面的広がり緑井、線的にみた古市と程度の差こそあれ、その発生時はほぼ同時とみてよいのではないか。古市の自然堤防のカーブ、その背後（西側）につらなる土盛りの部分は安川のデルタ先端部としても考えられるが、他方南下する古川の自然堤防でもある。10米1万年にみれば、古市の微高地は例の10米ラインのあたりとほとんど同時に点として発生していたとも考えられる。古市の西側で定用水（八木用水の南下する部分は、かつての安川や古川の影響を受けた後背湿地を流れる分流路であろう。その西側はやはり古川を主体にした流路で自然堤防をつくっていたであろう。最初の安川の平常時はなおその西側で大町と中須の境付近を南下していたろう。図3に示した中須付近の大きい破線（小字の境界線）が如実にそれを示している。東から古川の水を受けたと思われるあたりに大川の小地名があり（中須）、川東付近（大町）からは小字の境界線も南西へ下がり、小字の中河原（中須）は安川・古川の合流も考えられる。南の黒川（中須）付近では安川と古川の双方が合流して相当に深く、水が黒くみえたのであろう。黒川の南で北下安との境には葛ヶ島（中須）、その東で旧国道と河道の間は津戸ヶ島（古市）の小字があり、「島」の名称をそのまま受けとれば、やはり水の豊かなところであったろう。この付近は古市・中須・北下安が接し、さらに近くには西原分もきている。安川と古川は大町の東沖を合流した形で流れ、南にある北下安の上言土手（北下安）をつくったのであろう。なお、北下安の広い畑地の部分はより古い時代の中洲ではなかったか。そこには「浜」という小字名が『芸藩通志』の村絵図に残っている。

祇園の市中は微高地で、さらにそれを取囲む形で細長い小高地がある。700年代に律令制の施行にともない当地は伊福郷いふき(いおき)に比定される。巖島文書仁安元年（1166）に佐伯郡伊福郷堀立に志道原荘の倉敷地が定められた（現在の南下安帆立はその名残りという）。また、嘉応3年（1171）に壬生

東：前近代における広島湾頭地域の開発とその進行（後）

荘の倉敷地が桑原郷内萩原村に設けられた。なお、天長10年（833）佐伯郡人伊福部五百足<sup>たり</sup>との関係を考えたり、安閑紀廬城部連<sup>いおきべのむらしき</sup> 枳<sup>こ</sup> 苜<sup>ゆ</sup>喩が6世紀の当初に設けられたという安芸国<sup>こしべ</sup>過戸廬城部屯倉を献納したという（安閑天皇は500年前後の生で九州～関東に多くの屯倉を設けたという—いわゆる大化改新以前の直轄領）ことから、屯倉当地に比定する場合もある。要するに、500年頃には現在の微高地がほぼでき上がっていたということであろう。当地の高度が6.5米ということは、700年にみても紀元前6500年頃に微高地形成の原点を求めるべきか。

すなわち、1万年前頃は図2の10米ラインあたりが海岸線であったとすれば、そこから4米程下がって現在の祇園の微高地があるわけで、ここでも地下の傾斜と地上の傾斜が類似しているとみるべきか。前6500年頃といえはこの微高地は水面下にあるが、干潟になると滞りがみられるように、沿岸流に洗礼されながらも土地の形成が少しずつでも進んでいたものか。さらに、もう少し観察すると西原には（今は畑地になっているが）かつての広い中洲があり、祇園の微高地も当地も高度はほぼ同じであり、片方は線状で片方は面的広がりであり、さらにデルタをつくるような河口に近いところで自然堤防ができていることは改めて考えさせられることで、川のもつ水勢の微妙さに思いをよせるのである。

この古川筋が、当地では古代における郡郷制で西の佐伯郡、東の安芸郡の郡界となったようだ。当沖積平野では佐伯郡として緑井郷、養我郷<sup>3)</sup>（養義一八木か、養須一安か）、若佐郷（旧日浦村の筒瀬のあたり、若狭原を吉田東伍は宛てる）などである。『広島県史原始古代』でも若狭郷を当地に考え、天長10年（833）に佐伯郡人若桜部常継や佐伯郡人伊福部五百足<sup>いおきべ</sup>らは力田の輩（常に農事に精力を傾注する模範的農民）であることにふれている。これにより、祇園の微高地一帯でも800年代には農耕が行われており、その土地形成はそれ以前に十分なものがあったものか。若狭原の方は地形より

3) 『和名類聚鈔』、井上通泰・山田孝雄・新村出顧問、正宗敦夫編・校訂、風間書房、1970年。

考えて、水田よりもむしろ栗林や畑地に重点が置かれていたであろう。

つぎに、古代の安芸郡には漢弁郷（可部）、弥理郷（美利—三入）、河内郷（飯室、小河内、鈴張など）、幡良郷（原—東・西、三川、小田、矢口のあたりという）、安芸郷（府中）などをあげる。古川を境に東西で郡域がわかれ、ここでは原が対象となる。古代にあっては2字を基本にしたので原は幡良の表現になったと思われる。なお、幡良郷を福木（現在は安芸町—東区）のあたりに考える場合もある（図4）。郡域が中世前後以降では古川西に広い佐伯郡を東西に分けて佐東郡と佐西郡、古川以东（可部より上流部では以北）から呉付近まで海岸に沿っていた安芸郡を南北に分けて安北郡と安南郡となっている。そして佐西郡は近世で佐伯郡、同じく佐東郡は沼田郡になった。同様に安北郡は高宮郡、安南郡は安芸郡となる。この背景には中世において安芸府中の国衙の権力の一部を任され、手当を受ける形で入部した武田氏が、後に金山城を拠点に領国化を進めたことにある。

武田氏は、鎌倉・室町時代を通じて（一時的な中断はあったにしても）安芸国守護ないし守護的な隠然たる地位にあり、幕府も時によっては対大内氏への防禦もあって暗にその社会的力量を認めていたようである。武田氏は在庁官人の福島氏も自分の被官化し、南北朝初期（1340年頃）には彼を守護代にしている程である。武田氏は一国の守護はそれにふさわしい領国をもつべきであると主張し、分郡化（佐伯郡の東部で古川の水運も考え、沖積地の水田耕作による米の経済を把握する）を周囲の諸勢力（厳島勢、国衙など）に認識させることに力を尽くした。武田氏は1350年頃から1450年頃にかけて佐東から山県・安北郡中心に、一族を伴や小河内（図1の三角形のマーク）などに配しながら、福王寺（真言宗）の中興や継続的支援、国人衆を輩下においた。それにもかかわらず、大内氏（武田氏と対立する厳島勢が支援を求めた）は安芸に出兵し武田氏と抗争している<sup>4)</sup>。耕作農民

4) 現在、東区尾長町から中山町へ越えるバス道路は「大内<sup>とうげ</sup>峠」と呼んでいるが「峠」は西日本では「タオ」が普通である。しかし旧称は「オチゴエ」（大内越え）であり、武田氏と対戦するために出陣した大内氏に由来するという。

東：前近代における広島湾頭地域の開発とその進行（後）

の立場では耕地が戦場になり、若者が社会的利益を求めて戦いに参加したり（労働力の不足）、水害などの悪条件はあったろうが、逆に地域の安全や秩序を守り、沖積地での深耕に耐え、使用寿命の長い鉄製農具が身近に入手できる条件が武田氏によってつくられていたと思われる。武士も戦闘には鉄製品が必要であり鍛冶職人（兼農でなく専門職として）の質・量的生産は緊急の課題であった。そして、その余波は当然に農具の増産（質・量的に）につながったと思われる。

かくして、武田氏は祇園市中に匠のような職人を居住せしめ、地域の農業の生産力を高めること<sup>5)</sup>などで、商人の集住や市場集落形成への方向づけを示したものと思われる。なお、『広島県史原始古代』では、平安末期の安芸国の歴史では国衙所在の安南郡府中と、この佐東郡南部（祇園付近）の2大中心地に言及する。もちろん前者は政治的性格で、後者は水運や商・工・市場的性格である。武田氏の金山城は前面に祇園や古市を拠点化し、後背は安川筋を伴へと考えていたようだ。河口港としては長東付近で現在の放水路の前身の山手川筋が海面への出口であったと思われる。

さて、長東付近では市場付近から南へ、土砂の高まりがあり（そのために茅原も曲流している）、その南の限界は「安芸長東駅」のあたりで山手（平原）から平地へ向う東西のラインと考えられる。このラインの山手で平原（橋）付近には御供田こくうでんの小字名があり、巖島神社との関係を指摘している（『祇園町史』）。先述したが、新庄地区（微高地、一里塚所在）と長東のこの東西ラインの間の旧国道では、一部を除いて（国道沿いの）2～3

---

5) 西原の北東部で、古市方面からの古川の河道が強く当たる部分から、その河道は大きく東へ迂回する形となる。このあたりは、地元での伝承では中世に人工的に付替えた結果であるという。大出水の逃げ道を大きく広くとることで、西原頭部での古川堤防強化と連動して洪水禍を相応に避けることはできたであろう。とくに、1600年に入って新川（古川に対応、現太田川）の出現や人工堤の強化が加味されて、安全度は増すことになる。逆に、安川筋で安神社前から西原へ出るあたりは、河道の曲がり度で出水時に水の当たりが強く、毎年のように決壊の恐れがあった。

米の高い土盛りが約250米続いており、往時の大河を連想させる。山県郡での巖島社領志路原荘の倉屋敷（立券は仁安元年—1166）、同じく壬生庄の倉屋敷（同じく嘉応3年—1171）が桑原郷内に設けられたが、このあたりの四至に「限東江、限南大河、限西山峰云々」とあり、上記の内容につながる。東は湾流の一部が上げ潮となって遡上し広い入江は戸坂あたりから西原南一帯に広がっていた。海船は上げ潮・下げ潮で動き、干潮時には漕を残した干潟が広がっていたろう。

ところで、嘉応3年の下文では桑原郷萩原村に倉屋敷が置かれたとあるが、現在の萩原は上安の北の谷間であり、川船と海船の接点として一時的に貢物を保存する場所には考え難い。萩原は後に改名されて平原になったとするのはどうであろうか。「ハギ」は「ハケ・ホケ」など崩壊地形に通じるが、2者ともに昔から山くずれの多いところであった。「ヒラ」の方は、緩やかな傾斜地で崩壊の時期の後にくる地面の安定期（やはり時には崩壊もある）で、村の地主神でもあった大歳さん（字大利）の在地でもある。そして少し平地に向えば例の御供田こくうでんという地名もある。巖島神領と結びつけて種々の再考が必要だ。

#### (4) 原庄・北庄

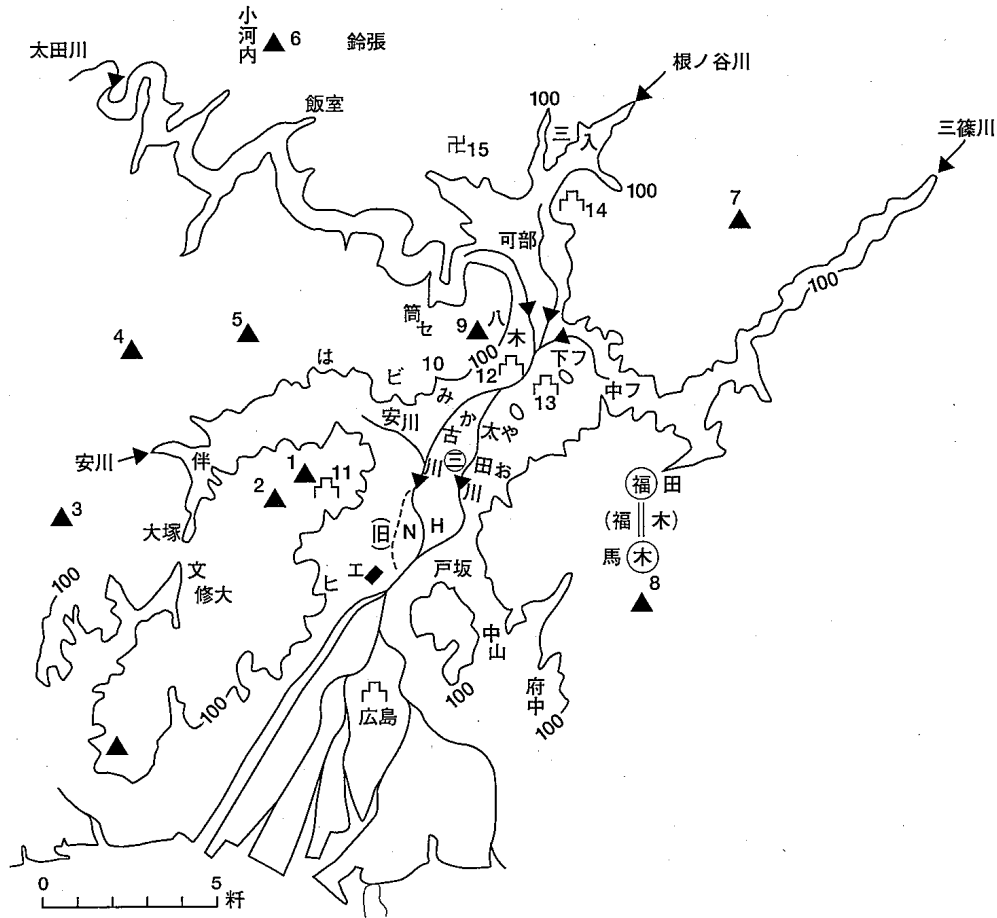
古代の幡良郷を中世の原庄に求めるのは改めて考えるとして、武田氏は巖島勢や祇園社の下安を包み込みながら原庄の経営にも力点を置いたであろう。それは水運の古川に沿い、下安という伊福郷や山本・長東などに比定される桑原郷からは対岸にあり、広い中洲が広がっていた。祇園社の対岸の西原側には「今津」の地名が残り（南の八日市の有名さはないが）、河港としての役割をもつ場所であったろう。

さて、『芸藩通志』は東原村について「もと西原村と一村なり、此村は倭名抄所載幡良はらにて古記に載る原庄、また桑原庄とも見ゆ」とする。桑原庄は山本・長東のあたりとする主張があり（現在の新庄は原新庄ではなく桑原新庄に考えるのが長東の対岸ということからも当然のように思われる）、



東：前近代における広島湾頭地域の開発とその進行（後）

図4 等高線100米をたどる  
(豊平町域)



- |    |                  |      |                       |
|----|------------------|------|-----------------------|
| 1  | 金山 (銀山)          | 411米 | 筒セ (筒瀬) → 若狭郷 (?)     |
| 2  | 火山               | 488  | 下フ (下深川)              |
| 3  | 向山               | 665  | 中フ (中深川)              |
| 4  | 岳山 (武田一族)        | 521  | や (矢口)                |
| 5  | 荒谷山              | 631  | お (小田)                |
| 6  | 牛頭山 (武田一族)       | 672  | み (緑井)                |
| 7  | 白木山              | 889  | か (川内)                |
| 8  | 呉婆々宇山            | 682  | ビ (毘沙門堂) (武田氏) 250米   |
| 9  | 阿武山              | 586  | 旧 (旧古川) (付替えた?)       |
| 10 | 鳥越峠 (筒瀬へ)        | 280  | N 西原 } (原郷, 原庄?)      |
| 11 | 金山城址 (武田氏)       | 260  | H 東原 }                |
| 12 | 城山 (城址) (香川氏)    | 80   | ㊦ 三川 (村) (古市, 中筋, 東野) |
| 13 | 地藏堂山 (古城址) (久村氏) | 75   | ヒ 平原                  |
| 14 | 高松城址 (熊谷氏)       | 338  | は 萩原                  |
| 15 | 福王寺 (山) (武田氏中興)  | 500  | エ 安芸長束駅 (JR)          |

江戸時代は楠木、打越、新庄（以上旧三篠村）、長束、北下安、南下安、西原、東原の各村は一括して沼田郡里組と呼ばれた。寺町から楠木村の横川へ渡れば（天満川）広島城下をはずれた近郊地域ということであろう。他方、東原は同じ江戸時代には緑井、八木、温井、中調子、中須、大町の領域に入り川内組を構成した。この川内組には<sup>きたのしょう</sup>北庄になる中筋・東野が入らず、東原のみ南へ飛び出した形である。北庄内の中筋・古市、東野、小田、矢口は家老上田主水の給地であった点に関係しているのであろう。他は藩の蔵入地や明知・給地入り交じりなどとなっている。戦後の昭和の大合併の機運のなかでは、太田川・古川に囲まれた純粹の意味での川内村（温井・中調子）、古市町の中筋・東野、祇園町の東原の5地区の合併構想が実現の手前まで進んだ例があった。東原は村域が小さく、西原と組合村を形成していたが、歴史的には西か北かで揺れる地理的位置にあったわけである。

ところで、東野は「キタンショウ」の代名詞で呼ばれ、近隣地域では「東野」は十分に知られていない面がある。元和5年（1619）の時点では中筋・古市、東野を合わせた北の莊村で、寛文4年（1664）では中筋・古市村と東野村に分離し、明治22年（1869）に再び合併して三川村となった。室町時代（1338～1573）の頃は、北庄として矢口や小田（太田川東岸）も古市・中筋、東野とともにその領域（4村）に含まれていたようだ。小分流はあったかも知れないが、現太田川のような水流のなかった時代のことである。小田八幡（通称小田のお宮、<sup>こうずみ</sup>弘住神社）はこの4村を祭祀圏としてきたが、なお深河、福田の地名が関係するものの（1280年代）、他方ではそれらは<sup>たと</sup>田門庄域とする考え方があつた。そして、温井や中調子のあたりは、先述したように分流の広がる未形成地で、1600年当初での現太田川の主流安定化に至る前の状態であり、北庄に付属しての開発の進行化のなかにあつたろう。

「温井」や「中庄司」（中調子）は天文10年（1541）に初出とされるが、1600年代に入ってから的人工堤の強化や用水路の整備が進み（旧分流路の

## 東：前近代における広島湾頭地域の開発とその進行（後）

利用も)、石高も上昇している。温井や中調子のあたりは常に最初に水の影響を直接に受けるため、開発も十分には進み得なかったろう。この2地区が古川から東の安北郡域に位置していたとしても、北庄のような社会形成は十分でなかったため、開発力のある武士も入りやすかったのではないか。そのために、この2地区は佐東(分)郡との関係が強められ、後の沼田郡にそのまま引継がれたことになったのではないか。他方、中筋・古市、東野はたとえ新川(現太田川)によって分断されても川東の小田、矢口と同じ安北郡(後の高宮郡)に残っているところに、広く地域形成の熟度の強さを知らされる。その形は、上田主水の知行地にそのまま引き継がれたことでも証明されるのではないか。いわゆる地域としてのまとまりである。古川が西原付近で大きく東移したことにより、西原は武田氏の影響も受けやすく、東原も巻き込んで佐東郡域に取り込まれたのは当然のことであり、当時としては開発も十分に進んでいたとみるべきである。

## 結びにかえて

この太田川沖積地一帯は、米作(鎌倉時代からは二期作)ゆえに高い生産性と労働集約性を示す地域に成長し、水運・商品の移動など市場を発達させてきた。それは、安芸国衙の地方政庁と地方経済の中心を担うものでもあった。鎌倉時代の当初、地頭とともに諸国に設置された守護(警察・軍事などに関係)は、国衙の提供した場所に定住地をもったが、当地ではそれが可部付近であったようだ。『広島県史中世』は、没収された葉山介宗頼(頼宗)の後継者に任命された宗孝親そうののりちかが安芸国の国衙の最高位につき、原郷や佐東郡本、安南郡などに地頭職をもったといい、可部荘の地頭職では建保5年(1217)の存在を示す。後に承久の乱(承久3年—1221)で京方に参加した宗孝親は地位を失い、武田氏が還補された。その武田氏も文暦2年(1235)では厳島神主家の藤原親実と交替させられるが(1223炎上の厳島神社造営推進のため)、それが済むと再び武田氏に戻される(1240年頃)。その後、鎌倉幕府内の政変で安芸国でも1200年代の後半には武田方か

ら北条方へ守護領へ移るが、武田氏は水面下でその勢力を維持していたようだ。

武田氏は、自勢力の発展のために築城を考え、その位置を金山に決めた。その地は眼下に佐東川域の水運・市場・生産の盛行など好条件の地を収め、さらにそれは中山峠から安芸府中方面も遠望し得る地でもある。築城は1300年頃とされるが、彼ら一族が当地で定着化するためには、一方で地域住民に生活・生業面で不安をなくする努力が必要であり、また、生産手段への十分な配慮が求められたと思う。とくに、鉄材は好品質なものは武具に使用するものの、それ以外は農具向けであるとしても、専門職人を集め育成することはもちろん、その調達が問題であった。

安川流域でも砂鉄採取があったともいうが、その砂泥は大町周辺にも深く堆積しているようで、地下でのカナケ水は現在もみられるようだ。ところで、武田氏は鉄をどこへ求めて活動したのであろうか。山県郡豊平町域には現状の推定で凡そ200カ所の野タタラの跡が残っており、現在もその一部について研究が進められている。中世では当地域へ南から武田、東から毛利、北西から栗栖、北東から吉川の各氏が入り、さらに地元の笠間氏も躍動している。すなわち、当地域は砂鉄の採取権争奪の場でもあったと考えられる。また、当地域は古く中世に馬飼いの伝説があり、それが近世から戦前の昭和まで（軍馬も）引継がれてきた。

総じて、原始古代から中世へかけて広島湾頭部では、山間地・丘陵地から低平の沖積地へ開発が進んだ。この場合、農民の生業と生活の安全を点一線の状態から面的に拡大したのが中世武士であった（それは逆に武士の経済力増強にも役立ったことではあるが）。同時に武士は農業土木（築堤、水利、水防など）にも配慮した面があったようで、そのレールは近世の大名領国態勢へ移行する前段階でもあった。

### 参 考 文 献

- 『広島県史—原始・古代』広島県，1980年。  
『広島県史—中世』広島県，1984年。  
『郡役所廃止記念—安佐郡誌（複製版）』1975年。  
『広島県の地名』日本歴史地名大系35，平凡社，1982年。  
『日本史小百科—農村』大石慎三郎編，近藤出版社，1985年。  
『祇園町史』広島市，1970年。  
『安古市町誌』安古市町，1970年。  
『古市町誌』古市町，1955年。  
『豊平地域に見る砂鉄関連の遺構群—古代・中世期における中国山地の採鉄技法を探る』日岡巖（豊平町文化財審議会委員），2003年。

### Summary

#### Development, Progress and its Effect on the Hinterland of the HIROSHIMA Bay Area Before the Meiji Era (Part II)

Terutada HIGASHI

We have Hiroshima Alluvium situated at the hinterland of Hiroshima Bay which Ohta River has made into gradual formation in the long stream of time.

It comes to be a narrow flat in the course of nature, with 15 kilometers long from north to south and 4 kilometers wide from east to west, approximately along the winding path of the river.

The trait of it is considered to be under the natural and social environment as follows.

- (1) Farming continues under the benefit of sunshine and water without succumbing to the intermittent natural force of flood.

- (2) Human culture has developed since the old times on the surrounding hillside area of it.
- (3) With the water transportation flourishing, market-towns came into being everywhere on the river from the earliest time which enables it possible for many people to settle there.
- (4) It was a point, connecting riverboats with cargo-boats on sea-foutcs.
- (5) In the Middle Ages, it was a warrior class that exerted their social powers on territorial management and developement/exploitation positively or aggressively. The warriors paly a role of safeguarding the lives of people and protecting their livelihood even except at the time of battle activity.

In order to fulfil it, they sometimes offer the know-how of making various implements and materials heplful to farming.

Iron materials are useful to farming implements, especially when the deep digging into the soil of alluvium becomes necessary.

The warriors themselves need iron materials for the purpose of making war instruments, not to speak of.

Some struggles took place among the factions of the warriors to monopolize the interests of the interior parts of Hiroshima Alluvium which is counted to have the material-source of iron.

The characteristics of the aforesaid area shows a historical exemplification of the collaboration of warriors and farming people, sharing the common aims, which contribute a regional long safety.

図2 八木の狭輪（城山付近）における川上と川下（概略図）  
[注] や：八木城山 み：皆川山 網かけは現在畑地



(この地形図は明治32年国土地理院の測図による)

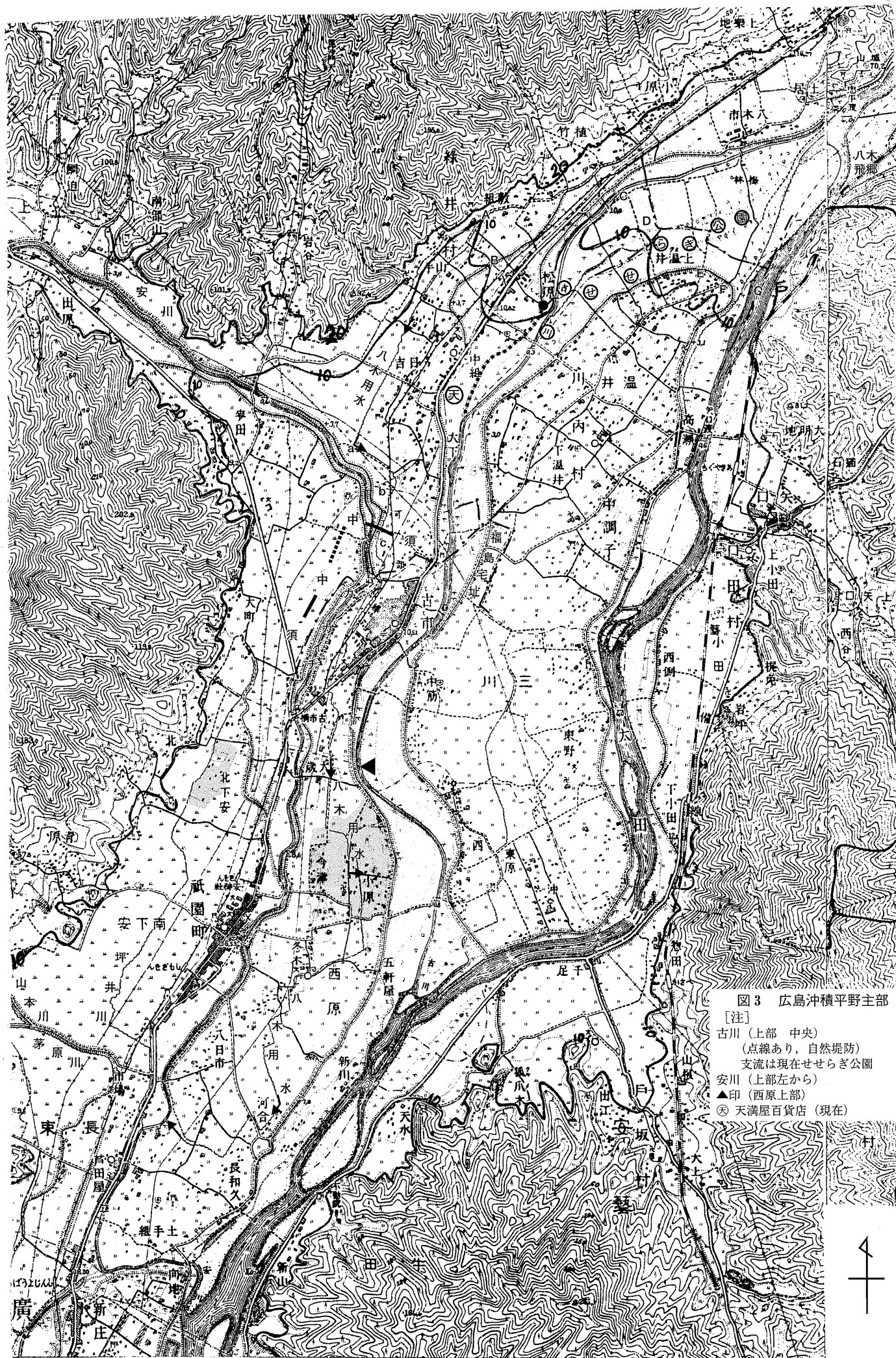


図3 広島沖積平野主部

- [注]  
 古川 (上部 中央)  
 (点線あり, 自然堤防)  
 支流は現在せせらぎ公園  
 安川 (上部左から)  
 ▲印 (西原上部)  
 ⊗ 天満屋百貨店 (現在)

(この地形図は大正7年国土地理院の測図による)